

華国鋒体勢
の矛盾

政変以来五ヵ月、華国鋒体制の強化がしきりに伝えられるが、果たして実情はどうなのだろうか。「四人組の罪状」をあばけばあばくほど、華国鋒の政権さん奪は正当性が見失われていく。かわって鄧小平の影が色濃く浮かび上がってくる……。

1 見えてきた「中国の内幕」

北京政変による華国鋒体制の発足以来、はや五カ月になろうとしている。だが、華国鋒体制は、いまだ公式に組織的・政治的な認知



鄧小平の「影」に
ゆれる中国



中嶋嶺雄
(東京外語大助教授)

を得ていないのである。つまり、これほど重大な政変があつたというのに、党中央委員会総会さえ、依然として開かれていないのであり、ましてや党大会ないしは全国人民代表大会が開かれるはずもなく今日にいたっているのである。どう考えても異常事態だといわねばならない。

にもかかわらず、すでに華國鋒体制は安定したとか、「四人組」追放によって、中国はすっかり生まれ変わったといった観測もあるようだが、このような見方は、つい先日まで毛沢東体制になんら矛盾はなく、

毛沢東の死によつても集団指導体制が揺るぎなく形成されるであらうといった非現実的な主観的見解の誤謬と同根であつて、まったくとるにたらないものであらう。

それよりも、われわれは、当の中国当局が「四人組」批判の必要上、次々に明らかにする「罪状」を通じ、中国自身の公式論調によつて最近の「中国の内幕」を手にとるよう知る事ができる。たとえば、「上海を根城に党と国家権力の乗っ取りを企んだ『四人組』の罪状」(『北京周报』一九七七年第六号)によれば、まず、「四人組」は「毛沢東思想にかわつて『張春橋思想』なるものをデッチあげ、党を乗っ取り国家権力を奪取し、資本主義を復活するための『理論』にしようとした」という。そして、「毛沢東思想は『時代おくれ』になつたとひぼうした」というのだ。

このような批判で思い起こされるのは「秦始皇帝の時代は過ぎ去った」という昨年四月の天安門事件の際の「反革命分子」によるスローガンであるが、「毛沢東思想」の絶対化傾向から離脱しようとする風潮は、やはり毛沢



華國鋒主席

東晩年には党中央といわず、一般民衆のあいだといわず、共通してかなり根強かったのではなからうか。今日では、『張春橋思想』はマルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想

を「発展させた」ものであり、マルクス主義を「発展させた」ものである、とさえ席に継ぐ『第四の里程碑』である、と『四人組』は高言した」と、とがめられている。この辺の真偽になると、いかに「四人組」といえどもそのような「張春橋思想」を「毛沢東思想」以上に鼓吹したのかどうか信じがたい。しかし、われわれが文革派上海グループの私党的機関紙ではないかと見なしていた『学習と批判』誌については、やはり、その

ような雑誌であったことが暴露されており、「彼らが直接牛耳っていた『学習と批判』誌は、数々の反動的論文を掲載した刊行物であった」（同前）とされるにいたっている。

この雑誌は昨年第十号まで発行されたが、私のように国外で予約して定期購読している読者に対しては、第九号までしか届いていない。予約金は返還されるのであろうか。そして、「四人組」とくに江青は、この雑誌を使って、「自分を呂后になぞらえ、現代の『女帝』になることを夢見た」という。この点もわれわれの考えていたとおりであった。そして、上海では「ある幹部は、一九三〇年代の江青のけがらわしい行為を熟知していて、一九四〇年代と五〇年代に江青を問題にしたことがあるという理由だけで、張春橋に投獄され……、また、ある幹部は、張春橋が林彪の別荘用に二千平方メートルの土地を流用しようとしたのに異議を申し立てたかどで、何年も投獄された」という。毛沢東体制の「内幕」がこのように見えてきたといわねばならない。私は、これまでもしばしば軍と民兵との対立にも触れてきたが、「四人組は、軍隊

にも手を伸ばし、軍隊を分裂させ、混乱に落とし入れようとする一方、民兵の隊列に手を伸ばし、人民解放軍から独立した「第二の武力」をつくり、民兵をこれらの道具に仕立てようとした」という。だが、結局、「四人組」は『われわれにあるのはペンだけで、鉄砲はない』と嘆いた。王洪文は『私がいま一番心配しているのは、軍隊がわれわれの手中にないことであり、軍隊のなかにわれわれの人間がいないことだ』と述べた」という。これは本音であろう。

それだけに、一挙にして華国鋒のクーデターに出会ったのであり、そのことは、北京政変の経緯を詳述した昨年十二月十七日付『人民日報』編集部論文「滅亡寸前の狂気のあがき」を冷静かつ丹念に読めば歴然とする。たしかに「四人組」は、毛沢東死後、「既定方針」とおり事を運ぶ」との八道囀り（それ自体、「四人組」が改竄したものだと思われる）を、お墨付きとして急遽、党中央を固めようとしたのであったが、昨春来の「走資派」批判がいささかも根づいていなかったことに示されるように、生産点や党、政府および軍

機構の末端ないしは中間の単位を掌握していなかった「四人組」としては、結局のところ、『人民日報』その他のマス・メディアを動員して先制攻撃的なプレス・キャンペーンを展開することぐらいしかできなかったのである。つまり王洪文の告白どおり、「われわれにあるのはペンだけで、鉄砲はない」状況だったのであり、だからこそ「四人組」は一挙に一網打尽にされたのであろう。

中国当局は、「四人組」が、「武装決起計画」をもち、十月九日に北京で、翌十日に上海で決起して、北京決起が失敗した場合は揚子江をはさんで華国鋒勢力と徹底対決する計画であったなどの「武装決起計画」の存在を外国紙にリークしており、国内的にもそのように教育している模様であるが、この点は、林彪事件のときの「八五七一工程」同様、事後になってどうにでも作成可能な筋書きである。ともかく「四人組」は一網打尽にされてしまった。ところが中国の公式見解によると「四人組」の上海における手下が、華主席をはじめとする党中央の「四人組」粉砕の情報を秘密ルートを通じてキャッチしながら

なお、上海の新聞に『既定方針どおり事を運ぶ』ことについての論文をひきつづき発表するよう指示し、放送局に八永遠に既定方針どおり事を運ぼう『』という歌の放送をつづけた。これは彼らの反革命武装反乱計画の一部であった」（前掲、『北京周報』）という。

このような「秘密ルート」の存在といい、党中央の熾烈な権力的角逐の様子といい、すべて中国の公式報道が語る「中国の内幕」にほかならない。こうした「内幕」が露見せざるを得ないことによって、これまでわれわれが描いてきた中国内政についての輪郭がきわめて妥当であったことが確認できるのである。

2 華国鋒のジレンマ

それにしても、中国の政治潮流の変化は大きく、また速い。去る一月八日の周恩来一周忌前後には、亡き周恩来を追慕する民衆の心の動きが、もはやとめどもないほどになり、今日では『人民日報』など公式紙誌は連日のように周恩来を最大限にたたえている。このような潮流は同時に失脚した鄧小平の再復権

を強く求める新しい政治潮流となつて中国社会の基底を流れはじめている。こうして、昨年の天安門事件に際して、人民英雄記念碑に掲げた周恩來の遺影に赤い小さな花瓶をつるした中国民衆の知恵はいまようやく実ろうとしているのだ（「小瓶」は「小平」を意味し、つまり亡き周恩來の継承者としての鄧小平への民意の発露を示すものであった）。「走資派」批判が大々的にキャンペーンされていた昨年のいま頃にくらべると、まさに隔世の感があるといえよう。

だが、「四人組」の打倒という大きな代償によつて、まさに十月七日の北京政変当日に党主席兼党中央軍事委員会主席の地位に就いた華国鋒にとつて、北京政変の本質はやはり華国鋒のクーデターであったという事実は動かしがたいものである。いかに「四人組」が「極悪非道の反革命分子」であったにせよ、いずれも党大会が正式に選出した最高リーダーであったことに変わりはなく、そのような「四人組」との角逐がいかに酷烈な状況にあったにせよ、一連の諸事実からすれば、十月上旬の極限状況におけるルール違反はむしろ

華国鋒の側にあったのではないかとの疑念を打ち消すことはできない。

もとより、「四人組」はこれまで永く毛沢東の威を借りて勝手気ままに振舞い、毛沢東王朝を牛耳って大衆に君臨してきたがゆえに、「四人組」打倒は中国民衆にとつても、党幹部にとつても、いつかは果たすべき課題であったから、それが一挙に実現したことはまさに歓喜すべき慶事であつて、そのかぎりでは、華国鋒は英雄たり得る。しかし、なんといつても「四人組」こそ、たんに文化大革命の中心的な担い手であつたばかりか、毛沢東にもっとも近い存在であり、これまでは文革の「新生事物」の生き証人であつたはずである。

それだけに、やがて「四人組」打倒の興奮から覚めてみると、華国鋒はなぜ「批判—団結—批判」ないしは「闘争—批判—改革」の「毛沢東思想」方式を実践しなかったのかという当然の疑念を誘うであらうし、華国鋒としては、こうした疑念をまえにして、一挙に彼らを打倒した今回の衝動的な処置を説得的に正当化する根拠に乏しいといわねばならな

い。つまり、自己の行為の正当化と自己の地位の正統性の双方の根拠に苦慮せざるを得ないのである。こうした立場にある華国鋒に可能な手立ては、いきおい「四人組」を「党史上最悪の犯罪人」に仕立て、「四人組」の「旧罪」を必死になつてあばき、他方では、昨年四月三十日に毛沢東が「あなたがやれば私は安心だ（你辦事，我放心）」といつて華国鋒を後継者に任命したのだという、これまた「四人組」同様のお墨付きに依拠せざるを得ず、そのようなお墨付きを「四人組」と競つてみずからの正統性を確保しなければならぬといふ、きわめて前近代の非社会主義的な権力継承劇を主演せざるを得ないのである。そのようななかでは結局、華国鋒個人への英雄崇拜、天才論的な礼讃を開始する以外になく、最近、華国鋒の肖像写真が毛沢東のそれと並んでいたところに氾濫しはじめていることも、このようなジレンマの反映である。

「四人組」の「旧罪」暴露にかんしていえば、たんに「四人組」は「蔣介石国民党反動派と切っても切れない数々のつながりをもつ

学校法人
—阪神学園—

浪速予備校

大阪市北区芝田町六九(大阪駅北五分)
〒530 電話06-372-2166代

大学受験科
第一本科(昼) 選抜コース
…選抜試験
3月26日
一般コース
…申込順入学
開講日…4月18日
科目…英・数・国・理・社
第二本科(夜) 一般コース
…申込順入学
開講日…4月18日
科目…英・数・国・理・社

高校補習科
午後クラス科(夕)高2・3年生対象
…申込順入学
科目…英・数・国
週4日授業
(水・土・日・休日)
詳細は
募集要項
無料送呈

ていた」(昨年十二月の「農業は大寒に学ぶ」第二回全国会議での華国鋒演説)とか、江青は三〇年代から国民党が送りこんだ「紅色女郎であった」(『人民日報』一九七六年十二月五日)といった表現はまだまだ上品な方で、これが社会主義国家の党の公式報道かと思うと慄然とするような度ぎつさで下品な言葉を連ねて毎日報道されているのである。

北京政変を思想的・理論的に総括し得ずに、こうした言葉遣いでの「旧罪」暴露に終始している最近の状況こそ、華国鋒体制の内在的危機のあらわれであり、一方、中国の民衆は、時がたつにつれて、それほど、「四人組」が悪辣であったのなら、なぜもっと早く処断できなかったのか。なぜ彼女らを党の最高

リーダーに選出したのか、なぜ江青は三十年間も毛沢東夫人であり得たのか、このような「悪女」、「女郎」を最愛の妻としてきた毛沢東その人はなんと愚かであったことか、毛沢東その人の責任は一体どうなるのか、といった疑問を当然感ずるであろう。こうした懷疑こそ、「四人組」を打倒してなお「毛沢東思想」と毛沢東路線の継承をしきりに強調する華国鋒自身の矛盾を白日のもとにさらさざるを得ない棘となり、矢となるものである。つまり、「四人組」打倒、「四人組」批判は論理的にはやはり「毛沢東批判」につながらざるを得ないのであり、ここに華国鋒その人の最大のジレンマがあらう。

このような状況こそ、北京政変以後五カ月

に近いというのに依然として党中央委員会総会さえ開かれず、華国鋒体制はまだ制度的に認知されていないという異常事態の大きな背景であろう。

この間、十二月上旬には全国人民代表大会常務委員会が開かれ、下旬には「農業は大寒に学ぶ」第二回全国代表会議が開かれたが、これらの会議はそれなりの社会的な意味はもったとしても、ほとんど政治的意味をもつものではないのである。たとえば、わが国の新聞が大きく伝えた、全国人民代表大会常務委員会での周恩来末亡人・鄧穎超女史の同常務委員会副委員長就任の件についても、そもそも全国人民代表大会常務委員会が全人代休会中の常設機関とはいえず、いまやさしたる

政治的機能を果たし得ていないうえに、同常務委員会副委員長はもとも二十二人も存在するポストであって、その一人に鄧穎超女史を加えることは、周恩来追慕へと傾斜している民意を華国鋒体制へと導くうえでは大きな意味があつても、さしたる現実的・政治的意味はもたないものである。こうしたなかで、國務院人事の空白がつづいているばかりか、肝腎の党中央政治局常務委員会は依然として華国鋒と葉劍英の二名のみであり、これでは正常な最高政策決定機関としての機能を果たし得ないであろう。

そのような折しも、各地での混乱、武闘などの情報相次いでおり、それは一部の「友好人士」が主張するように「四人組」時代の

過去の混乱だとはかりはいきれない状況を含んでいる。外部で傍受できる地方放送などは、四川、福建、湖北、河南、浙江、広東、遼寧など諸省の深刻な混乱を証明しており、このような状況のなかで、今日の中国はかなりの広範囲にわたる軍事管制下に置かれ、ようやく事態の、これ以上の深刻化を抑えたように思われる。

去る一月五日に『人民日報』が報じた国家建設委員会大批判組執筆論文「プロレタリア階級の天下を乱す王洪文の陰謀をあげく」は、「王洪文は翁森鶴(浙江省の四人組)の手先といわれる人物——引用者Vのような悪人を通じて、浙江省を混乱に陥れたばかりでなく、河北省の保定、江西省の省都・鄭州、辺境

地区、湖南省およびその他の地方をも混乱に陥れた。保定では王洪文が銃器、食糧、倉庫の略奪を支持したため武闘、内戦がずっと続いた。鄭州では、彼らは鉄道をマヒさせ、交通をストップさせて、経済建設をぶちこわした。辺境地帯では、彼らは下心をもつて民族関係を水をさし、民族の間を引き裂き、中華民族の大家庭の団結を切り崩した」と述べている。

こうした中国国内の現実、北京や上海の八定食コースVを一、二週間旅行してきただけではとうていつかめないものであり、短時日の中国訪問で華国鋒政権は安定などと語る人びとの中国認識こそ傲慢そのものだといわねばなるまい。

学校法人
—阪神学園—

神戸予備校

神戸市生田区楠町六一二〇(高速神戸駅北五分)
〒650 電話078-351-1524代

大学受験科
第一本科(昼) 選抜コース
…選抜試験
3月26日
一般コース
…申込順入学
開講日…4月18日
科目…英・数・国・理・社
詳細は
入学案内書
千共 300円

高校補習科
午後クラス科(夕)高2・3年生対象
…申込順入学
科目…高2生=英・数
(月・水・木・金授業)
高3生=英・数・国
(月・火・木・金授業)
詳細は
募集要項
無料送呈

3 「鄧小平の影」の増幅

このような華国鋒体制下において、「鄧小平の影」がますます色濃くなりつつある。去る二月七日、鄧小平の兄弟で武漢市革命委員会副主任の鄧欒が昨年の天安門事件以来、鄧小平同様、消息を絶っていたのに、武漢の北京—漢口鉄道ゼネスト五十四周年記念集会に復活したとの外電（二月八日北京発AFP時事）は、鄧小平その人の復活を近い将来に予測させるものかと思わせた。だが、「鄧小平の影」が色濃くなればなるほど、鄧小平復活問題はそれほど単純な問題でなくなりつつあるようだ。とくに華国鋒にとっては、昨年の天安門事件直後、彼自身が「党第一副主席」という異例のポストを手にしたとき、みずから加わった党中央政治局の、この決定において鄧小平を「反革命分子」として断罪しているだけに（鄧小平問題を「敵対的矛盾」だと規定したのであった）、鄧小平の全面的復権は華国鋒の矛盾した姿を、さらに露呈させることになる。一方、去る一月初旬、周恩来追慕の潮流のなかで、民衆のあいだから、鄧

小平の再復活を求める声が壁新聞として表明された事実は、それが一方で華国鋒崇拜が鼓吹されつつあるなかでの出来事であっただけに、きわめて注目すべき事実であった。

いずれにせよ、鄧小平問題は、当面の中国内政の最重要課題になりつつあるのだが、まったく、鄧小平その人のかくも遅く、したたかな政治生命力には驚嘆せざるを得ない。だが、ここ一、二年の中国内政の潮流を冷静に見きわめ、とくに昨春の「走資派」批判キャンペーンの理不尽な状況と天安門事件に発露した中国民衆の自覚的な政治選択の方向性を振り返り、そして、鄧小平のこれまでのキャリア（彼は、たんに党官僚として卓越した組織能力をもつばかりか行政面でもきわめて有力な指導者であり、同時に軍のなかにも根強い基盤をもっている。スターリン批判を敢行した一九五六年のソ連共産党第二十回大会に出席したり、一九七四年の国連資源特別総会に出席するなど国際面でも活躍の幅は広かった）と当面の中国共産党の人材欠如の内部事情を考慮すれば、毛沢東以後の時期に、再び鄧小平問題がクロースアップされるであらう。

席に就任しているとか、政治局の「顧問」に就任しているとかの一部の報道にたいしては、これまでのところ、中国当局はその態度否定しており、実際には、鄧小平再復活問題がそう単純な問題ではないことを示唆している。

4 すべての鍵は鄧小平に

もとより、北京政変にかんしても、その背後に「鄧小平の影」を大きく感じてきた私としては、鄧小平再復活問題での華国鋒にとつての最大の苛立ちとは、このまま民衆の支持に迎えられて鄧小平が復活することは、みずからが事件のたんなる「下手人」に堕してしまいかもしれないことであらう、と考えている。

そして、すでに天安門事件の「反革命分子」が名誉回復され、事件を鎮圧した「功労者」が「極悪非道の反革命分子」として断罪されている今日、路線的には鄧小平は完全に勝利したものだといえよう。鄧小平の勝利は同時に周恩來の勝利であり、周恩來は鄧小平路線の勝利であり、「走資派」路線の勝利であり、い

うことは十分に予測できたことであつた。

そして鄧小平自身、これまで私が本誌でもしばしば述べてきたように、毛沢東以後の時代におけるそのような時期の再来を確信していたがゆえに、「四人組」による「走資派」批判に際しても、「最後まで悔い改めなかった」のである。天安門事件直後の中央政治局会議で「反革命分子」と規定されて彼のすべての職務が剝奪されたのに、彼の党籍だけが残されたのは、まさに来るべき毛沢東以後の時代への「捨て石」としての措置だったのであり、いま、その「捨て石」はたちまち活きてきたのである。

つまり、天安門事件において、今日の華国鋒政権による「四人組」批判よりもはやくに痛烈な江青、姚文元批判が大衆的におこなわれたことに驚いた「四人組」としては（なお、天安門事件のそのような実像については、拙稿「再構成・天安門事件」『中央公論』一九七六年九月号参照）、是非とも鄧小平の党籍まで剝奪したかったであらうし、「四人組」から離反しなければ自らの将来も危ないことを、天安門事件によって感じた華国鋒らの非

わゆる「四つの現代化」（農業、工業、国防、科学技術の現代化）路線の勝利だといえるのである。

こうしてみても、鄧小平としては、路線的にもはや勝利し、状況がすっかり逆転した以上、あえてみずからの地位の明示的な復権を求めなくてもいい立場にある。これまでの鄧小平の言動からして、たとえば「鳳を捕るなら白い猫でも、黒い猫でもいいではないか」と語ったり、「毎日のように階級闘争などといっているのか」と語るなど、毛沢東在世中にあえてこのような大胆な発言をしたゆえんは、たんに彼が党の長老だとか、四川省出身の客家できわめて強靱な個性をもっているといったことだけではなく、彼は路線上の使命感には燃えていても、彼個人の地位やポストには、意外に虚心であったからではなかったかと思われる。

一部には、鄧小平が再復活に際して、党副主席、國務院（筆頭）副総理、人民解放軍総参謀長といった失脚前のすべての要職ないしは文革期までその地位にあった党総書記といったポストを要求しており、こうしたポスト

上海グループ文革派としては、この問題で中間的な動揺した立場をとったであらうし、李先念、葉剣英らの、いわゆる実務派リーダーや朱徳らの長老は、おそらく鄧小平の党籍剝奪に反対であつて、結局、党籍剝奪にまでは至らなかったものと推測せざるを得ないのである。

このような不透明な経緯が、鄧小平失脚に際してもあつたものと思われるが、やがて北京政変を経て今日に至ってみると、「四人組」が指弾した鄧小平こそ、論理的には、悪者とたたかった英雄にならざるを得ないのである。

そして、中国民衆は、天安門事件が明白に示していたように、周恩來路線の遂行者としての鄧小平に並々ならぬ期待を寄せているのである。このような民意を党中央も無視できないだけに、最近ではすでに「鄧小平同志」という呼称が復活し、鄧小平問題は「敵対的矛盾」ではなく「人民内部の矛盾」であつたという論理上の重大な修正がほどこされたのであつた。

だが一方、鄧小平は、すでに「党第一副主席

豊富な住宅実例で
住まいづくりにすぐ役立つ

住まい の設計

4月号/650円

◎総特集◎住まいづくりの出発点のあり方

住宅資金融資の上手な受け方と条件

家の配置と間取りの考え方と使える図面

予算に融資を
組み入れた
3.3m²25万円からの充実した家17例

《住まいの設備と機器》●既製品かユニット
式か造り付けか●三つの台所づくり●流し
台ガスレンジなどメーカー18社の台所機器
●①インテリア効果を考えた床材
●②塩ビ・木質系床材の果たす役割
●家と庭の2大無料設計サービス
●別冊付録「家のプラン」30例

③サンケイ出版

の問題で彼の復活が遅れているのではないかと
の見方もあるようだが、私は必ずしもその
ようなポストの問題だけではないような気が
する。

むしろ私は、今日、鄧小平復活の時期、そ
のポスト、公式にも、再復活した方がよいの
か、当分は「鄧小平の影」として存在した方
がよいのか、といった重要な決断のすべての
キーを握っているのは鄧小平その人ではない
かとさえ考えている。鄧小平としては、「さ
んざんもみくちやにしておいて、いまさらな
んだ」といった気持も当然あるであろう。
それほどまでに、今日の中国内政における
鄧小平の存在の意味は大きいといえようが、
このことは、まさに鄧小平問題として処理さ

れた天安門事件以降、急速「四人組」から離
反していった華国鋒その人のたどった道程に
もきわめて問題が多いことを同時に物語って
いる。

このような状況のなかで、昨年末、毛沢東
の一九六五年当時の論文「十大関係論」が初
めて中国で公表されたことにも、鄧小平の存
在がはずかっていたのではなからうか。本年
元旦の『人民日報』など三紙誌共同社説は、
この「十大関係論」のなかの「党内および党
外の、国内および国外のすべての積極的な要
素、直接または間接的な積極的な要素はこれ
をすべて動員し、わが國を強大な社会主義國
家に建設しなければならない」という個所を
とくに強調していたが、このような方向こそ、

いわゆる「四つの現代化」路線、「走資派」
路線、実務派路線、ひいては実権派路線にほ
かならないのであって、まさに内政の方向が
一九五六年当時の状況へ回帰しようとするこ
とを示しており、それは同時に文革路線、ひ
いては「毛沢東路線」の否定へと赴かざるを
得ない性質のものである。

われわれとしては、来るべき四月上旬の清
明節、つまり、天安門事件一周年に最大の注
視を向けねばならない。そして、明示的にも
鄧小平が復活し、彼が再び大きなリーダーシ
ップを発揮するような時がくれば、その時に
は、中国の国際関係にも、大きな変化が招来
されよう。この問題は改めて論ぜねばなるま
い。